



Title	ロシアの穀物輸出国としての発展可能性と制約要因 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	長友, 謙治
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第12507号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65369
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Kenji_Nagatomo_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名： 長友 謙治

学位論文題名

ロシアの穀物輸出国としての発展可能性と制約要因

本論文は、ロシアの穀物問題に焦点をあて、輸出国に転換して国際穀物市場で重要な役割を果たすに至った要因の分析、そこに内在するロシアの穀物輸出国としての脆弱性と課題の解明を試みたものである。

第1章では、旧ソ連の主要穀物生産地域(ロシア、ウクライナ、カザフスタン)が大穀物輸出地域に転換したことが世界の穀物市場にどのような影響を及ぼしたか、多国間貿易変化量マトリックスの手法などを利用して分析されている。とりわけ、主要な食用穀物である小麦においてロシアが大輸出国として国際市場に出現し、人口増加が著しい輸入諸国の増加する需要を賄う中心的な役割を担うようになってきたことが、貿易国の地理的分布とその動態の中で示されている。

また穀物需給構造の変化、すなわち 1990 年代の畜産縮小による飼料穀物需要の減少と 2000 年代以降の穀物生産回復による穀物輸出余力の顕在化が旧ソ連 3 国に共通する構造的背景であったこと示されるが、いずれの国も先進国などの恒常的輸出国に比べて気候要因などによる生産変動が著しく、とりわけ国内消費量に比べて輸出量が相対的に小さいロシアでは、穀物輸出力の不安定性・不確実性が顕著で、小麦輸出国としての安定性の面で大きな課題を抱えていることが明らかにされる。

第2章では、ロシアが穀物輸出国に転換した背景のうち、生産・供給面の変化、すなわち、縮小していた穀物生産が 2000 年代以降回復していったプロセスを取り上げ、その要因分析が行われている。穀物生産の縮小と回復の過程の中でその重要性がますます高まった小麦を分析対象として設定し、その縮小と回復の要因が単収変化と作付面積変化のいずれが主だったのか、小麦の単収変化の要因としては無機肥料等の生産財の投入や天候などのうちいずれが主だったのか、小麦の作付面積の拡大はどのようにして行われたのかといった論点について、地域による状況の違いに着目しつつ、定量的な分析を通じて解明が行われた。2000 年代の生産回復の要因は適地適作化による作付面積変化よりは単収増加が、そして単収そのものの増加には無機肥料に代表される生産財の投入量増大が強く作用していた、という結論が導き出されている。また、上記の結論が妥当するのは、北カフカス経済地区のように、穀物の生産面でも輸出などの販売面でも条件に恵まれた地域であり、その一方で、西シベリア経済地区のように、生産・販売のいずれの面においても相対的に条件に恵まれていない地域では、生産財の投入が回復せず、穀物単収は天候に強く依存し、作付面積の縮小が進行するという顕著な地域差の存在も同時に明らかにされた。さらに、これらの分析の結果見えてくるロシアの小麦生産拡大の限界についても論考されている。

第3章では、ロシアの穀物生産回復の背景にあった生産財投入や固定資本投資の回復とその地域差が生じた理由について、市場経済の下で生産財の投入や投資を決定する農業生産者のおかれた経済条件の変化、組織変化に着目しながら分析されている。穀物価格に比べ肥料等の生産財価格の上昇が上回り穀物生産の交易条件が悪化しているのに投入が増大していったという逆説的状況の解明が行われ、1990 年代から 2000 年代初頭まで農業生産者の行動を縛り付けていた資金制約の問題が解消されたことが主要な要因であることが明らかにされている。さらに、2000 年代以降の農業組織の資金制約からの脱却と生産財投入や固定資本投資の回復には、農業組織の構造変化もまた深く関係していた点が示され、農業生産主体の構造変化が、具体的にどのような経路で関係し、ロシアの各地域にどのような地域差をもって広がっているのかが分析されている。また、近年になって小麦単収増加の鈍化傾向が顕在化してきている点について着目し、上記要因による

小麦生産回復が既に限界点に達していて、今後の小麦生産拡大と輸出力の増大は次第に難しくなるだろうことが示唆されている。

第4章では、ロシアにおける畜産回復が飼料穀物需要と穀物輸出余力に及ぼす影響が分析されている。ロシアが穀物輸出国に転じたのは、ソ連崩壊後の畜産縮小と飼料穀物需要激減を大きな理由としていたが、2000年代後半以降の顕著な畜産回復にも関わらず、穀物輸出余力は減少することもなく、その後も輸出国としての地位を維持・発展させてきた。この逆説的状況について、畜産回復に伴う穀物飼料消費増加が1990年代の畜産縮小過程での飼料消費減少ほど大きくなかったことを示すと共に、生産増加が飼料効率の相対的に高い畜産物種類で進み、またそれらの部門での飼料の利用効率が技術進歩で大きく向上した点が主要要因であることが定量的に解明されている。

第5章では、政策面に焦点をあて、ロシアの穀物輸出力にどのような影響を与えるかが分析される。輸出力の不安定性・不確実性が顕著なロシアでは、輸出制限措置などの貿易政策によって輸出国としての不確実性が増幅される点、第4章に関連して、畜産物の輸入代替を促進し、国内の飼料穀物需要を増やす方向に働く政策と穀物輸出を拡大させようとする政策の間の整合性の問題、さらには、畜産物の輸入抑制措置やウクライナ危機に関連して発動された農水産物輸入禁止措置の動向や影響について考察されている。